慢性甲状腺炎（橋本病）

甲状腺ホルモンは、心臓や肝臓、腎臓、脳など全身の臓器に作用して代謝を活性化させるホルモンです。慢性甲状腺炎は、橋本病とも呼ばれる自己免疫疾患の一つで、甲状腺機能低下症を起こす代表的な疾患です。慢性甲状腺炎は非常に頻度の高い病気で、成人女性の１０人に１人、成人男性の４０人に１人に甲状腺の自己抗体がみられます。ただし、このうち甲状腺機能低下症になるのは４～５人に１人未満で、大部分の人では甲状腺ホルモンは正常に保たれています。発症は３０～４０代の、やはり女性に多く、男女比は１：２０～３０です。

原因

本来、細菌やウイルスから体を守るために作られる抗体が、自分の体や臓器に対して作られてしまうのが自己免疫疾患ですが、慢性甲状腺炎では、甲状腺に対する自己抗体により甲状腺が慢性炎症を起こして少しずつ壊され、やがて甲状腺機能低下症を生じます。なぜ甲状腺に対する自己抗体が作られるのかはわかっていません。バセドウ病は自己抗体で甲状腺機能を亢進するので、病気の状態としては正反対ですが、原因は非常によく似ています。

症状

甲状腺が腫れてきて、くびの圧迫感や違和感が生じることがあります。甲状腺機能低下症になると、全身の代謝が低下することにより、無気力、疲れやすさ、全身のむくみ、寒がり、体重増加、便秘、かすれ声などが生じます。女性では月経過多になることがあります。うつ病や認知症と間違われることもあります。血液検査では、脂肪の代謝が悪くなるので、コレステロール高値や脂肪肝による肝機能異常を認めることがあります。これらは徐々に起こってくる上、その感じ方に個人差があるため、血液中のコレステロールの異常高値で気づかれる場合も少なくありません。特に高齢者では、認知症と間違われる場合があります。

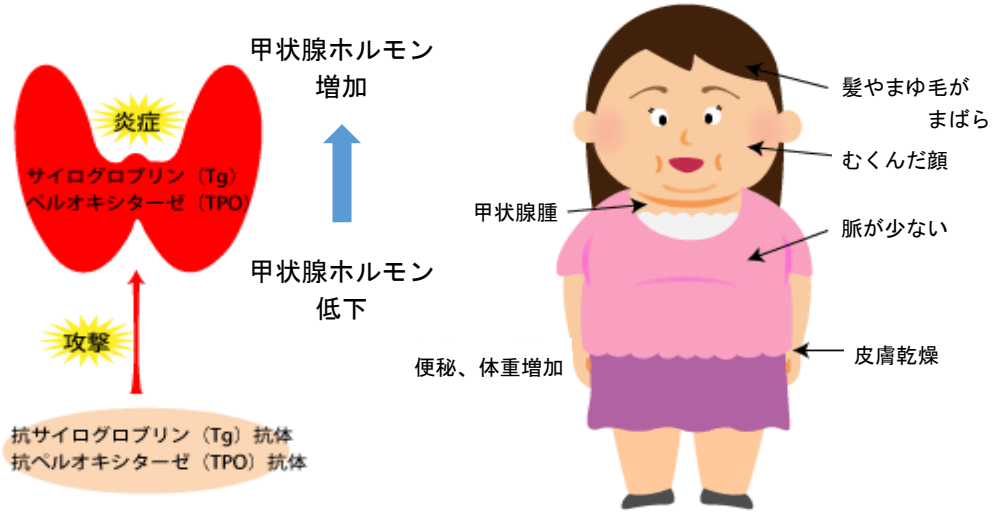
また、病初期に破壊された甲状腺から甲状腺ホルモンが血液中に流出して、一時的な甲状腺機能亢進状態を示すこともあり、バセドウ病と症状が類似しますがますが、３か月以内でおさまります。

診断

まず、血液中の甲状腺ホルモンが低値で、甲状腺ホルモンの分泌を促す、脳下垂体ホルモンの甲状腺刺激ホルモン（ＴＳＨ）が高値となります。また、甲状腺の自己抗体である、抗Ｔｇ抗体（抗サイログロブリン抗体）や抗ＴＰＯ抗体（抗甲状腺ペルオキシダーゼ抗体）が陽性となれば慢性甲状腺炎と診断されます。
画像診断法としては、超音波検査とシンチグラフィーの結果を参考にします。

治療

甲状腺機能が正常の場合は、原則的に治療は必要ありません。ＴＳＨが１０ mIU/l 以上かつ甲状腺ホルモンの値が低く、コレステロールが高い場合や認知症などの問題が見られる場合に甲状腺ホルモン剤（レボチロキシン：商品名チラージンＳ）の投与を開始します。



慢性甲状腺炎の病態と症状